



第35号

こまがた元気会だより



駒形地区の新しい交流・活動拠点がオープン！ ～元気会の新館として使用開始しました～

竹屋・田中の市道交差点近くの旧大川原栄喜氏宅（竹屋丙 30-1）については、今年度の市の空き家再生推進事業補助金による母屋の改修工事が終了し、12月から事務所としての使用や、地域の皆様の会合の場等として利用を開始しました。市道を挟んだ向かい側のマルシェと合わせて地区の新たな拠点として活用が期待できます。

*集落支援員（大平）や地域おこし協力隊員（椿）が月～金曜日勤務しています。

*10名程度の会合の場として利用できます。

*敷地内にも数台分駐車できますが、向かい側のマルシェ敷地も利用できます。

*従来の元気館（JA旧購買店舗）も会合の場等として継続して使用します。

利用に関する詳細は事務局（下記）にお問い合わせください。



ココです！

新館の位置図



新館内部の様子



新館の外観

今シーズンのマルシェ営業を終了！

元気会がサポートし5月中旬から営業してきた農産物直売所「こまがた元気マルシェ」は12月28日をもって今年度の営業を終了し冬季休業に入ります。再開は来春5月頃の予定です。

お陰様で、駒形小学校の農業科で作った農作物（コメ・サツマイモ・ジャガイモ）は完売いたしました。今シーズンの売上も開設2年目で100万円超（昨年度は33万円余）となりました。ご愛顧ありがとうございます。



冬季休業直近のマルシェの様子

令和5年12月26日 発行：こまがた元気会

《連絡先》喜多方市塩川町中屋沢字田中乙3（里の駅こまがた元気館）

電話 080-2805-1050（事務局：大平）

メール koma.genki7.7@gmail.com

《編集協力》NPO法人かけはし（代表理事 石島 来太）喜多方市寺田 4905-21

◎視察研修レポート(その3)◎

～10月25日(水)～

鮫川村の農産物加工・直売所「手・まめ・館」と豊かな土づくりセンター「ゆうきの郷土(さと)」を見学。鮫川村では「まめで達人な村づくり」のスローガンのもと、高齢者などに大豆の栽培を奨励し、地産地消、高齢者の生きがいと健康づくりにつながっています。拠点となる「手・まめ・館」は平成17年にオープン。近年は年間1億円を越す売上げとなっています。

また鮫川村では、平成25年に豊かな土づくりセンター『ゆうきの郷土(さと)』をオープンさせ、牛糞、もみがら、落ち葉、生ごみなどを原料に約5カ月かけて900tの堆肥を生産し、村内外に販売しています。まさに「循環型の村づくり」と言えます。



「手・まめ・館」の前にて



ゆうきの郷土(さと)の様子

～11月1日(水)～

下郷町「クラインガルテン下郷」の見学

クラインガルテンとは簡易な宿泊施設付きの市民農園。下郷町ではソバの栽培で有名な猿楽台地に平成21～23年度で30区画を整備し、東日本大震災やコロナなど困難な時期も続いたが、現在は週末に訪れて野菜作りを楽しむ都市部の住民などを中心に100%稼働しており交流人口の拡大に寄与している。



クラインガルテン下郷の農園

～講演会でも学習しました!～



～11月26日(日)～

「落花生を使った幸せ地域づくり」と題し、APJ株式会社代表取締役の松崎健太郎氏の講演会。

昭和50年当時には会津でも100町歩も生産されていた落花生に着目して地域資源の再生を図り、農工商連携型6次化として様々な企業と連携した商品開発、福祉施設への作業委託等の農福連携、大変な作業行程を一括して行う加工施設の整備、ラーメンの後にソフトクリームなどを楽しんでもらう店舗の営業など事業を展開されています。「空き農地」「空き家」など「空き」は資源となるという言葉は示唆的でした。



松崎氏の講演会の様子

～12月10日(日)～

「『農』を基盤とした地域づくり」と題し、農研機構の研究領域長、遠藤和子氏(喜多方市出身)の講演会。

現在、地域の話合いにより将来の農地利用の姿を定める「地域計画」作りが進められている状況にあるが、「農村の担い手」としては、新規就農者や非農家、都市住民などを含めて様々な担い手の確保が必要。特に地域資源管理の担い手も大事で、多面的機能支払交付金の活用も有効。その事務作業は大変だが広域的取組等いろいろやり方があるなどのお話は参考になるものでした。



遠藤氏の講演会の様子